

## 5-5 富士川断層連日監視と東海地震発生の子測

### Everyday EDM Measurement on the Fujikawa Fault for the Prediction of the next Tokai Earthquake

東京大学地震研究所 地質移動班

Earthquake Research Institute, University of Tokyo

東海地震の発生源となる富士川断層<sup>1),2)</sup>に対して、光波測距による連日監視が開始されてから10年が経過した。第1図は測線網を示す。富士川町観測点(O)、富士宮観測点(P)、富士市観測点(Q)から合計15の測線が観測されている。第2図はその観測結果である。富士川町観測点については月平均値で、富士宮観測点と富士市観測点については月平均値をさらに3個の移動平均した値で表現してある。精しい解析は今後の課題とするが、この図から一年周期の季節変動を除去した地殻変動は非常に小さいことが結論される。富士川断層への歪の集積が最近において小さい理由として、伊豆半島の地殻変動が活発化していることが考えられる<sup>3)</sup>。

次の東海地震の発生時期を予測するために過去の東海地震に関連した歴史地震を近い方から列举してみると、第1表のように安政地震、宝永地震、明応地震、元弘地震となる。このうち1331年の元弘地震は都司<sup>4)</sup>によって明らかにされたもので、大日本地震史料にあった富士山頂の大崩落の記事の他に、現在の富士市厚原にかつてあった日蓮宗滝泉寺の震災による廃絶の史実である。この寺は堅牢な地盤の上に建っていたにもかかわらず、富士川断層の東方500mに位置していたために被災したものと推定される。第1表の各地震の発生間隔は新しい方から147年、209年、167年となり、その平均は174年である。最新の安政地震が起こった1854年に最短間隔の147年と最長間隔の209年を加えると、2001年と2063年になり、平均間隔の174年を加えると2028年となる。

(恒石幸正)

### 参 考 文 献

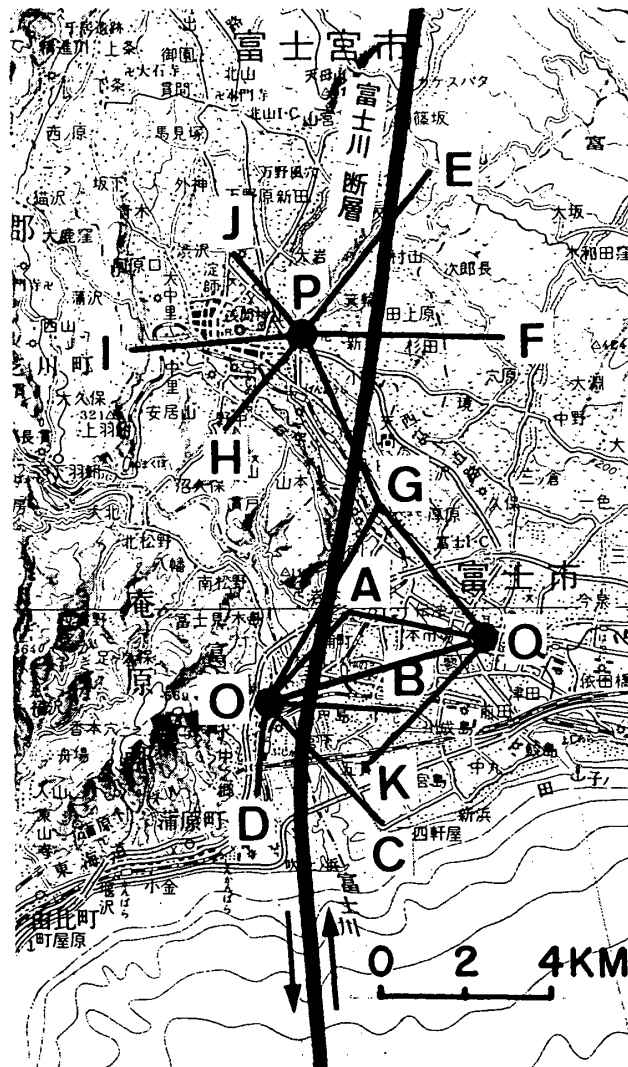
- 1) 恒石幸正・塩坂邦雄：富士川断層と東海地震，応用地質，22(1981)，52-66.
- 2) 恒石幸正：“東海地震”に関連する特A級活断層，第四紀研究，23(1984)，145-150.
- 3) 恒石幸正：自動光波観測で見た伊東沖噴火と地震，地球，13(1991)，103-108.
- 4) 都司嘉宜：静岡県富士市厚原の滝泉寺廃寺伝承に現れる元弘元年七月七日(1331Ⅷ19)の地震，地震学会予稿集，1987，No.1，179.

第1表 東海地震に関連する歴史地震と発生間隔

Table 1 Historical earthquakes related to the past Tokai earthquakes.

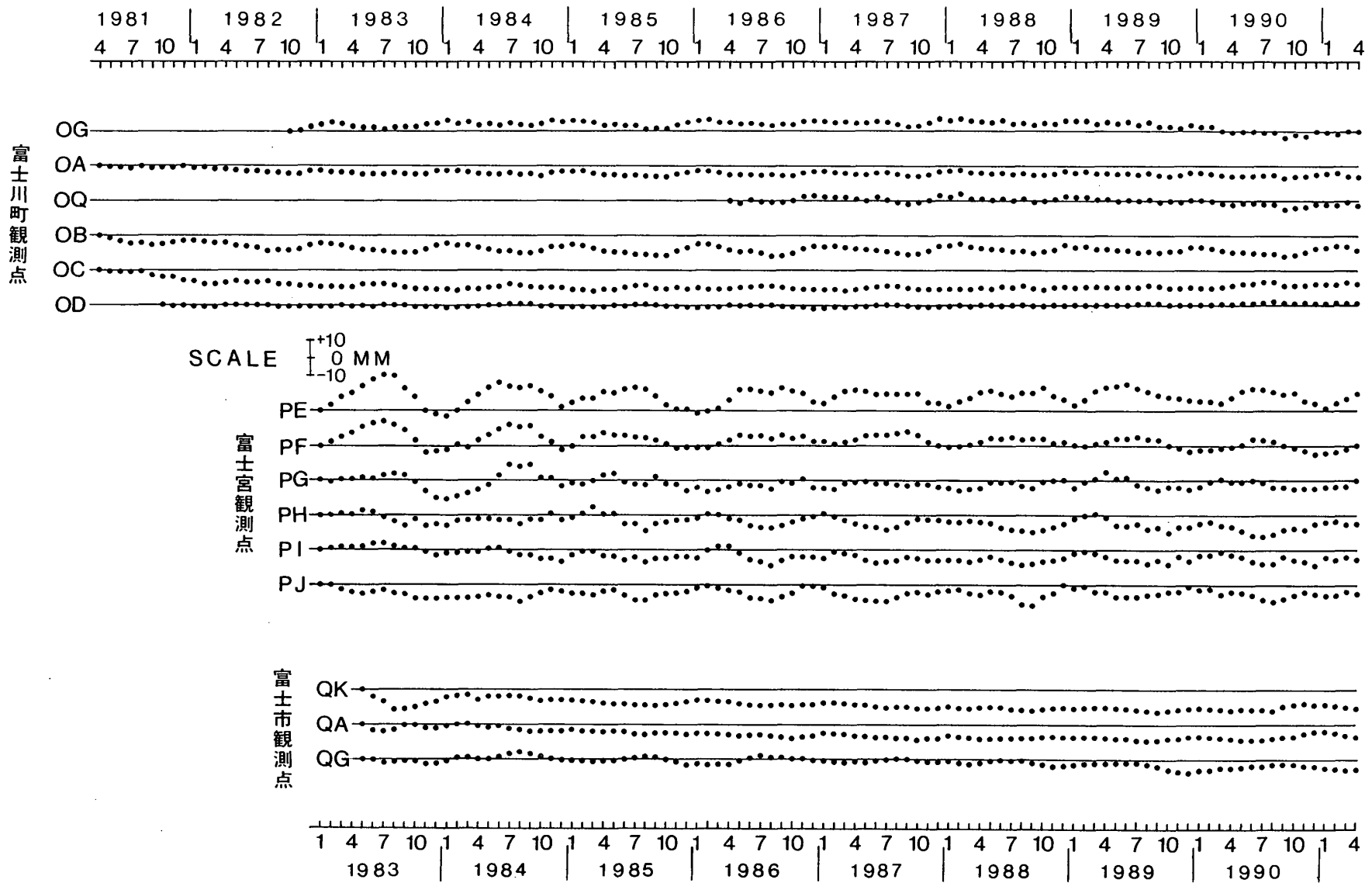
歴史地震	発生年	間隔
元弘地震	1331年(元弘1)	167年
明応地震	1498年(明応7)	
宝永地震	1707年(宝永4)	209年
安政地震	1854年(安政1)	147年
次期東海地震	(平均)	174年

2001年 ——— 2028年 ——— 2063年



第1図 富士川断層光波観測網

Fig. 1 Network of the measuring lines.



第2図 富士川断層連日観測の結果

Fig. 2 Results of measurement.